



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「保育の現場」から「子育て支援の場」への移行に伴う保育者の保育観／保育者観の変容
Author(s)	榊, ひとみ
Citation	子ども発達臨床研究, 18, 25-42
Issue Date	2023-03-31
DOI	https://doi.org/10.14943/rcccd.18.25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/90591
Type	departmental bulletin paper
File Information	060-1882-1707-18.pdf



「保育の現場」から「子育て支援の場」への移行に伴う

保育者の保育観／保育者観の変容

榊 ひとみ*

Transformation of Childcare Worker's View of Childcare／Themselves through Transition from “Field of Childcare” to “Field of Parenting Support”

Hitomi SAKAKI

【目次】

1. 問題意識
2. 課題と方法
3. 調査の概要とアンケート調査の結果
4. 自由記述とインタビューのコメントの分析
5. 結論と残された課題

1. 問題意識

本論の問題意識は、「保育の現場」（保育所、認定こども園、幼稚園等）から、「子育て支援の場」へ、また「子育て支援の場」から「保育の現場」へと、異動命令等の理由により、勤務先の異動を経験した保育者を対象に、保育者自身の「子ども理解」の変容を明らかにすることにおかれている。

川田（2017）は、「時代時代で、保育（者）に求められるニーズは変容する。子ども観や家族観、障害観等の変容は、保育の場に新たな課題を突きつけてきた。保育者は、ある時代にある場所に生き、個人の成育歴や被教育歴を負いながら、多様な現場で『子ども理解』を形成し、変容させてい

く。例えば、保育所づくり運動の時代と『多様な保育サービス』が謳われる時代、障害児の集団適応を重視する園と個としての育ちを重視する園、『担任』から『子育て支援』に異動・移行した場合など、保育者は好むと好まざるとに関わらず、置かれた条件下で自身の『子ども理解』と向き合わざるを得ないだろう。」としている。

しかしながら、「子ども理解」という保育の専門用語について、川田（2021：2）は、「近年発行された保育学・保育用語辞典をいくつかめくっても、『子ども理解』や『幼児理解』という項目が独立して立てられ、定義されてはいないよう」だとし、「あまりに自明なことばであるために、あえて対

* 札幌学院大学人文学部こども発達学科 准教授

象化されていないのかもしれない」ず、「また、意味が流動的で曖昧なものであるために、辞書的な定義として言語化することが困難ということも考えられ」としている。

2. 課題と方法

そこで、本論においては、「保育の現場」から「子育て支援の場」に「異動」（もしくは、「子育て支援の場」からの「再異動」）を経験した保育士を対象に、「子育て支援の場」への異動／「子育て支援の場」からの再異動によって、「どのような葛藤や違和感を持ち、その後どのように保育観や保育者観を変容させていったのか」を明らかにすることを課題とする。本論では、「異動」「再異動」の人事異動を含め、一旦、保育職を退職し、保育の現場から離れた後に、保育職から子育て支援職への異動も含め、広く「移行」とする。

このように課題設定をするのは、「子ども理解」なるものが何を指すのか、現時点においては、概念整理の途上にあるため、「子ども理解」の変容を直接的に問うのではなく、保育士の保育観／保育者観の変容論理の解明を試みることににより、子ども理解の変容についてのアプローチを試みようとするものである。

すなわち、保育士自身が、保育（者）の役割というものを、どのように把握・理解しているかによって、子どものどのような点を見るのか、子どものどのような姿を大事にするのか、子どものどのような点が気になるのかというように、保育士の子どもに対する見方や考え方は変わってくるだろうという仮説に基づいている。

上記の課題を明らかにするために、筆者は、市の子育て支援のあり方全般をよりよいものに変革しようとしている A 県 C 市の地域子育て支援実践者である L 保育士に調査協力を要請した。L 保育士の呼びかけにより、A 県 C 市の地域子育て支援実践に関わっている、もしくはかつて関わったことのある 12 名の保育士から研究協力を得ることができた。本論で取り扱うデータは、次の節で概要を述べる 12 名の保育士へのアンケート調査

と、12 名の保育士のなかから、半構造化インタビューにも協力頂けた 4 名の保育士へのインタビューで得られたデータである。本論においては、これら 2 つの調査データをもとに、保育から子育て支援への移行に伴う子ども理解の変容について、仮説的な結論を導出したい。

3. 調査の概要とアンケート調査の結果

調査は、上述のように、1) 12 名の保育士へのアンケート調査と 2) 4 名の保育士への半構造化インタビューの 2 つの調査から構成される。はじめに 12 の保育士へのアンケート調査の概要を述べ、次に半構造化インタビューの概要を述べる。

3-1 アンケート調査の概要

筆者は、C 市の子育て支援実践者との直接的な関わりがなかったため、かねてより C 市の子育て支援実践者とのつながりを持つ、大学で保育・心理学を教授する Y 教員に依頼し、C 市の子育て支援実践のコアメンバーである L 保育士を 2021 年 9 月に紹介頂いた。L 保育士への調査概要の説明を経て、L 保育士の声掛けにより、C 市の 12 名の保育士から、アンケート調査の協力を得ることができた。アンケート調査は、9 月に郵便にて発送し、10 月に 12 名全員より回答を得た。

3-2 半構造化インタビュー調査の概要

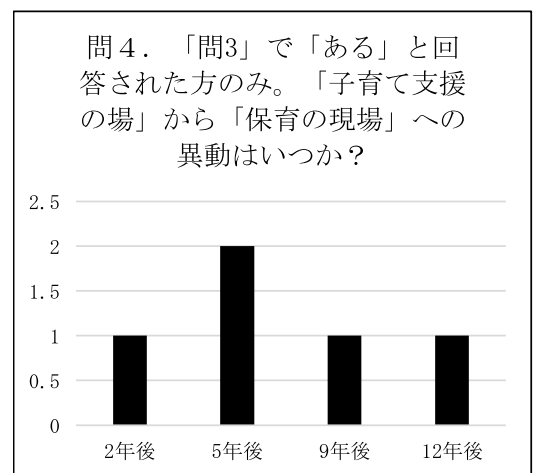
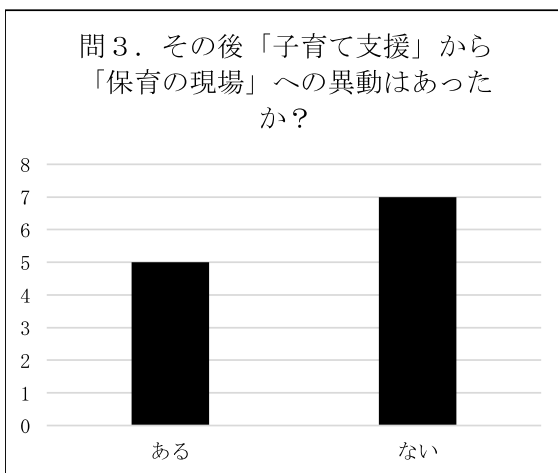
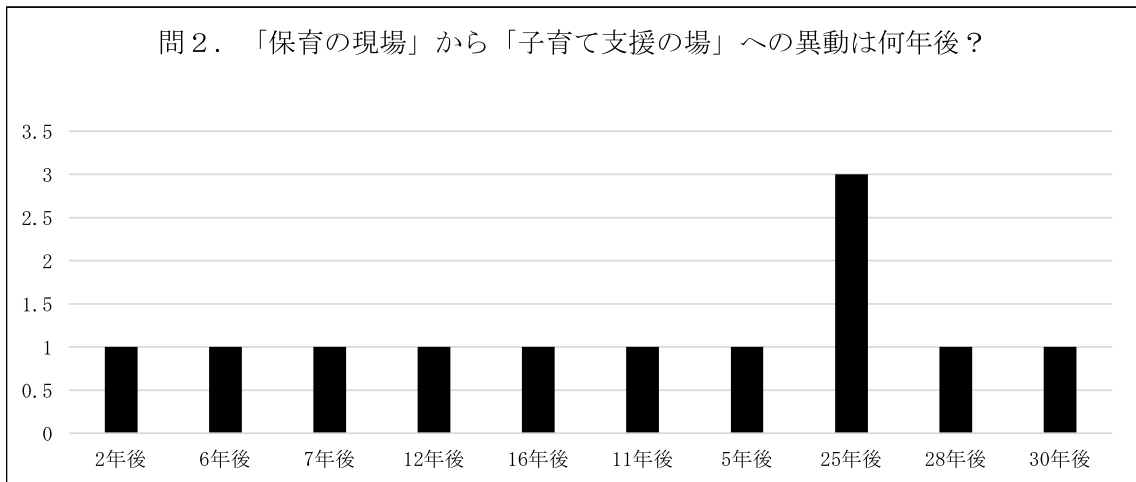
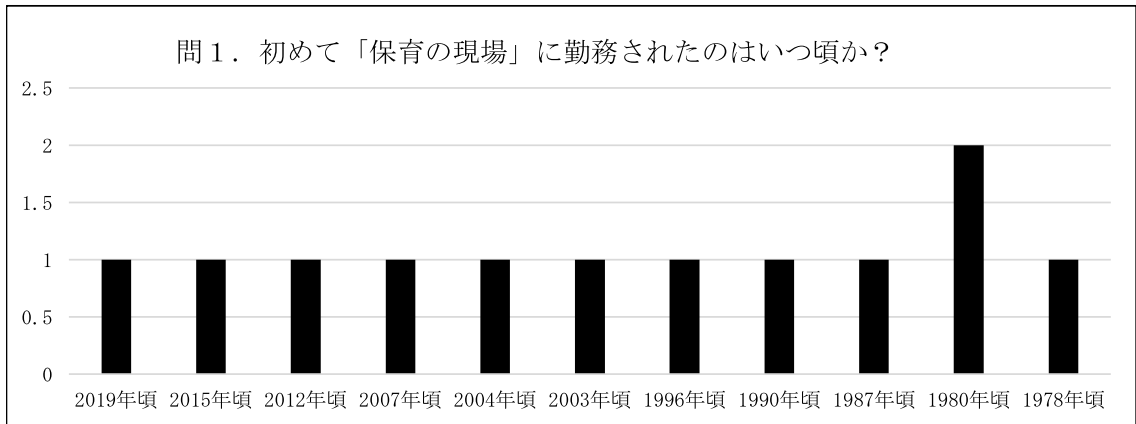
12 名の調査協力者にアンケート用紙を送る際、遠隔会議用のアプリケーションを用いて行う「インタビュー調査」にも協力頂ける方に、個人のメールアドレスを伺い、4 名の保育士に調査を実施した。半構造化インタビュー調査の概要について、【表 1】に整理した。

インタビュー日	調査協力者名	時間	面接／遠隔
2021年10月21日	B保育士	33分	遠隔
2021年11月6日	I保育士	41分	遠隔
2021年11月6日	K保育士	65分	遠隔
2021年10月2日	L保育士	40分	面接

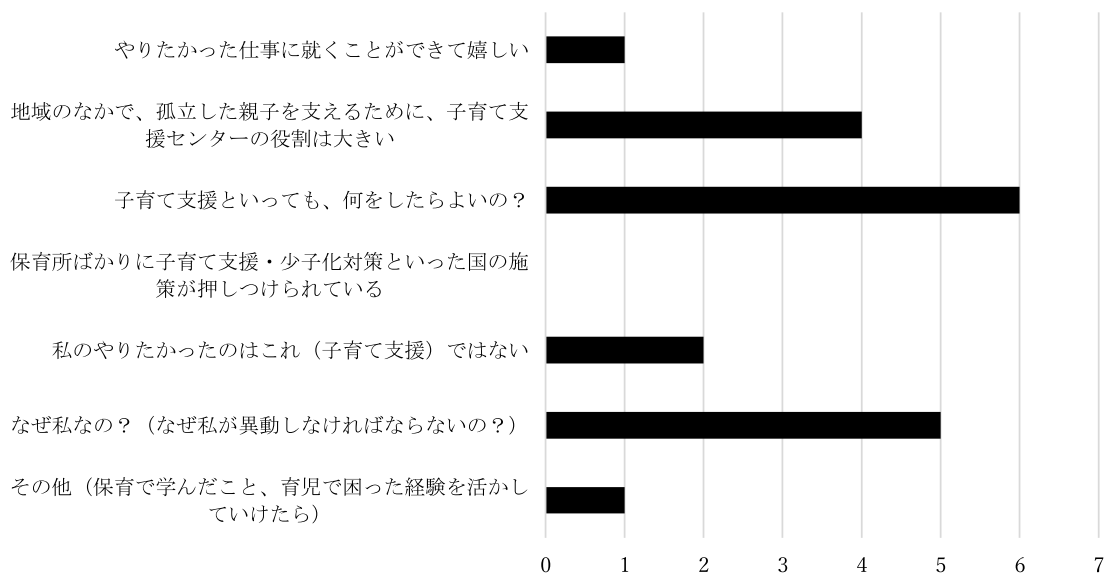
【表 1】半構造化インタビュー調査の概要

3-3 アンケート調査の結果

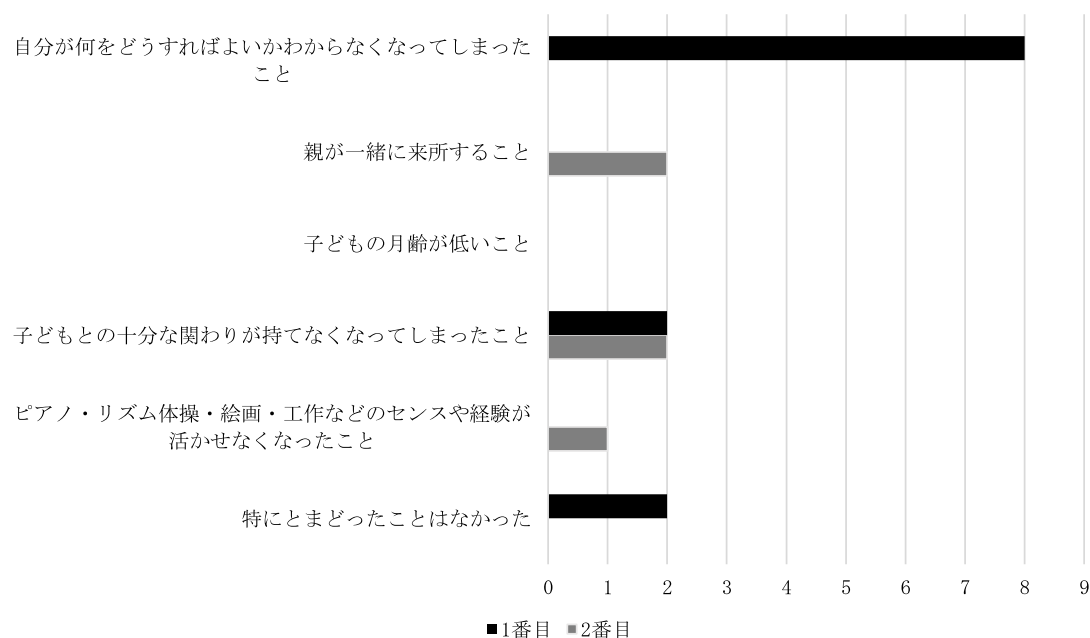
以下に、アンケートの調査項目と結果を示す。



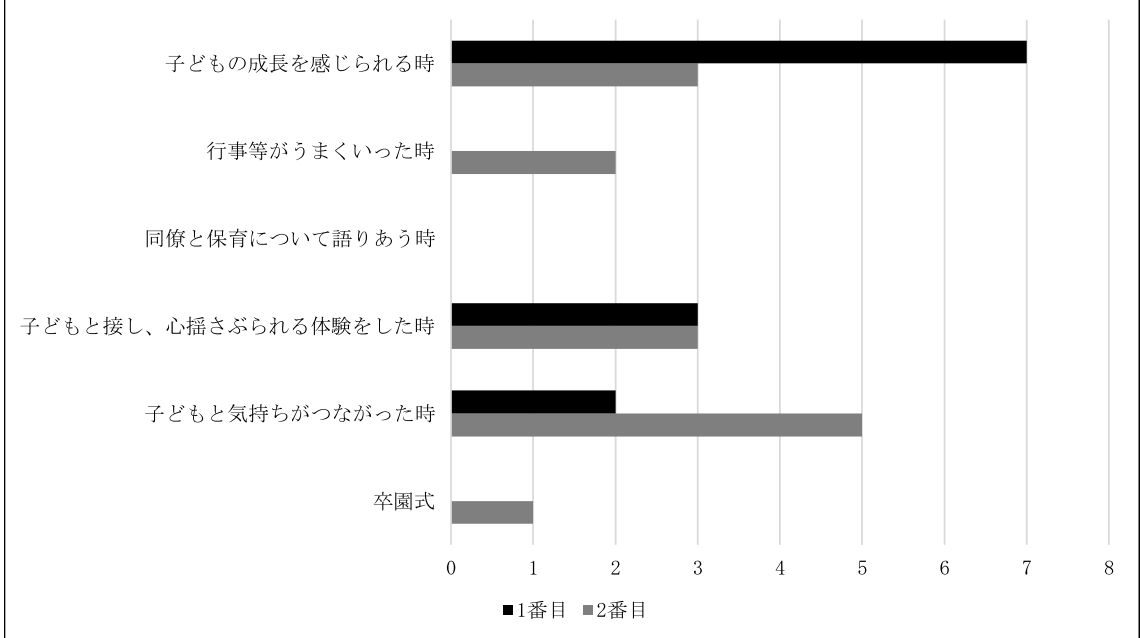
問5. 子育て支援の場への異動が決まった時の気持ちは？



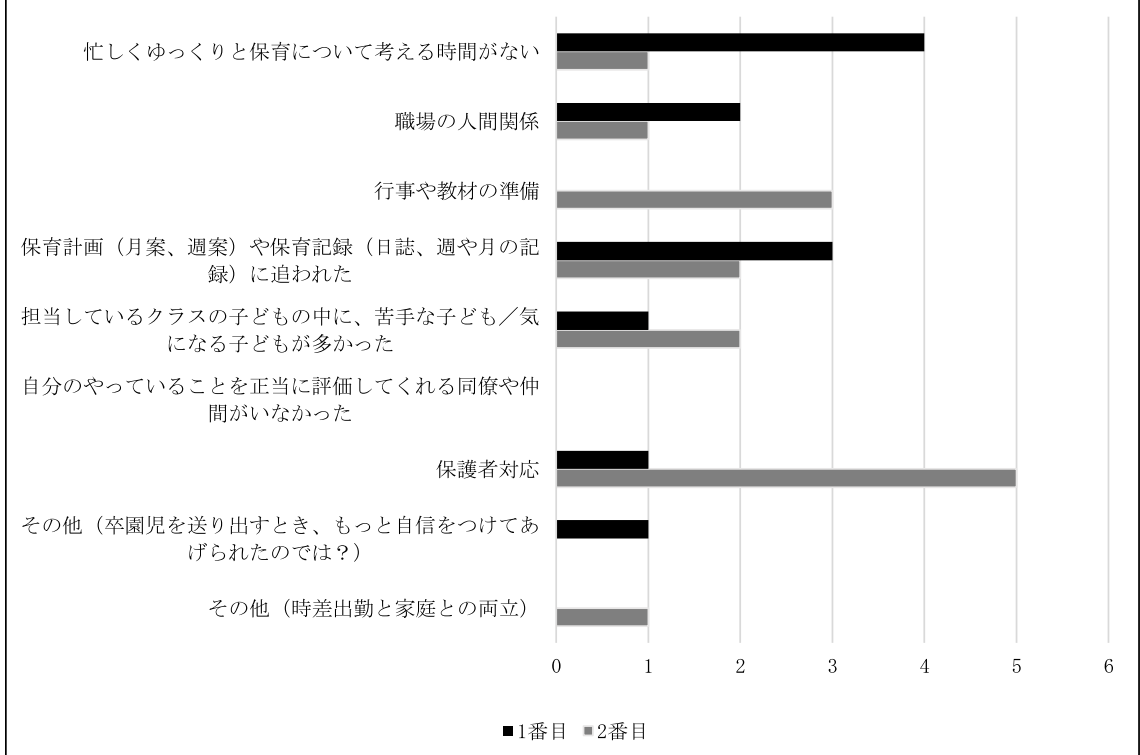
問6. 「子育て支援の場」での勤務でとまどったこと



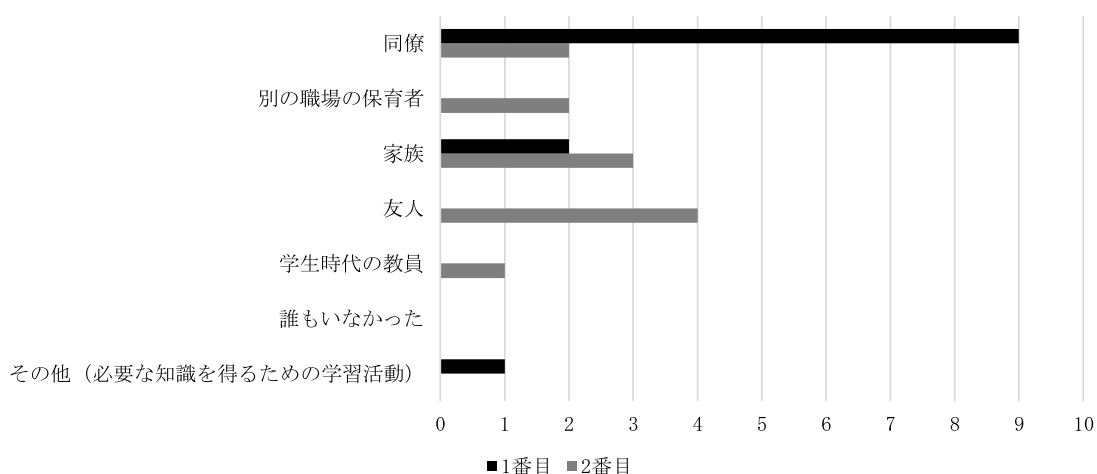
問7. 「保育の現場」でのやりがい



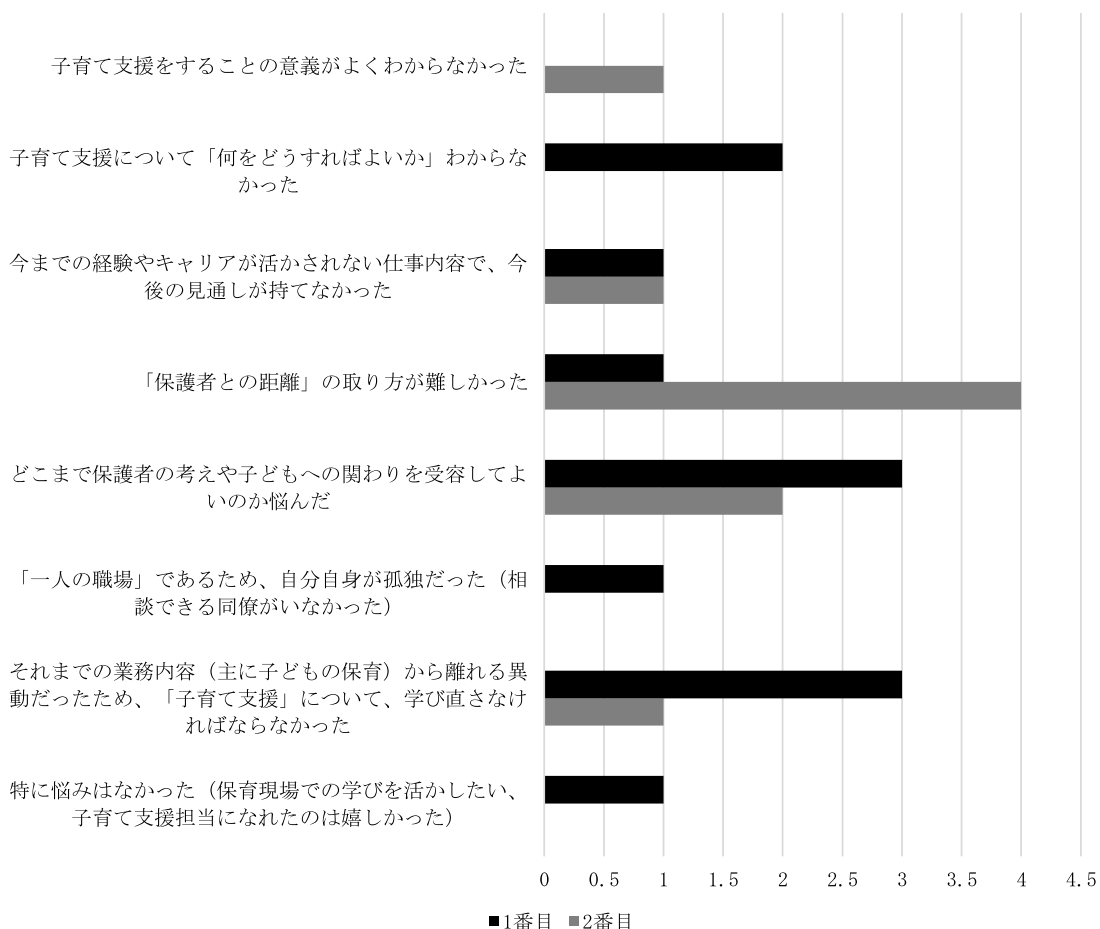
問8. 「保育の現場」での悩みごと



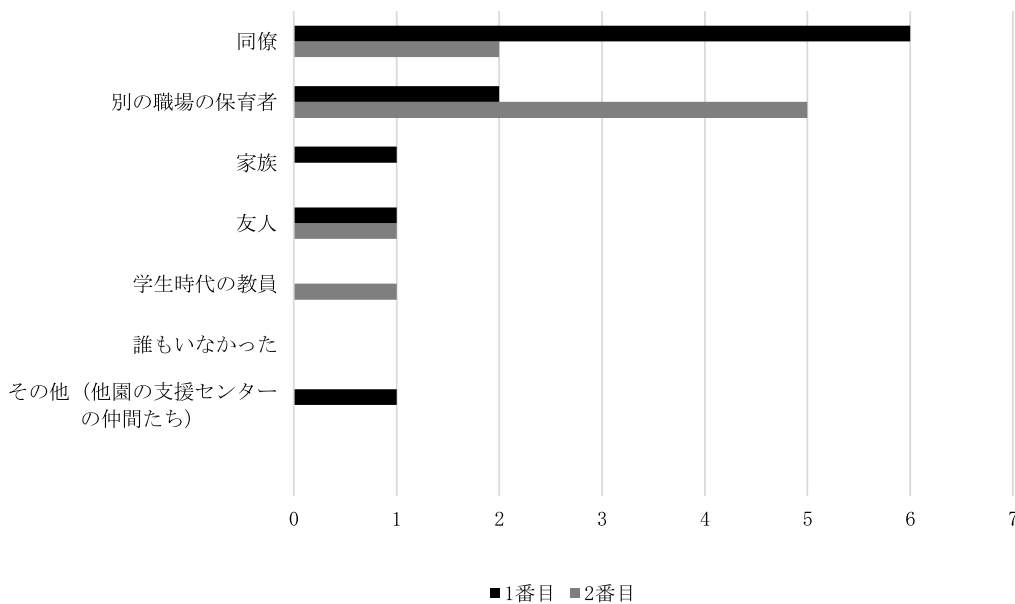
問9. 「保育の現場」での悩みごとの相談相手



問10. 「子育て支援の場」への異動後の悩み



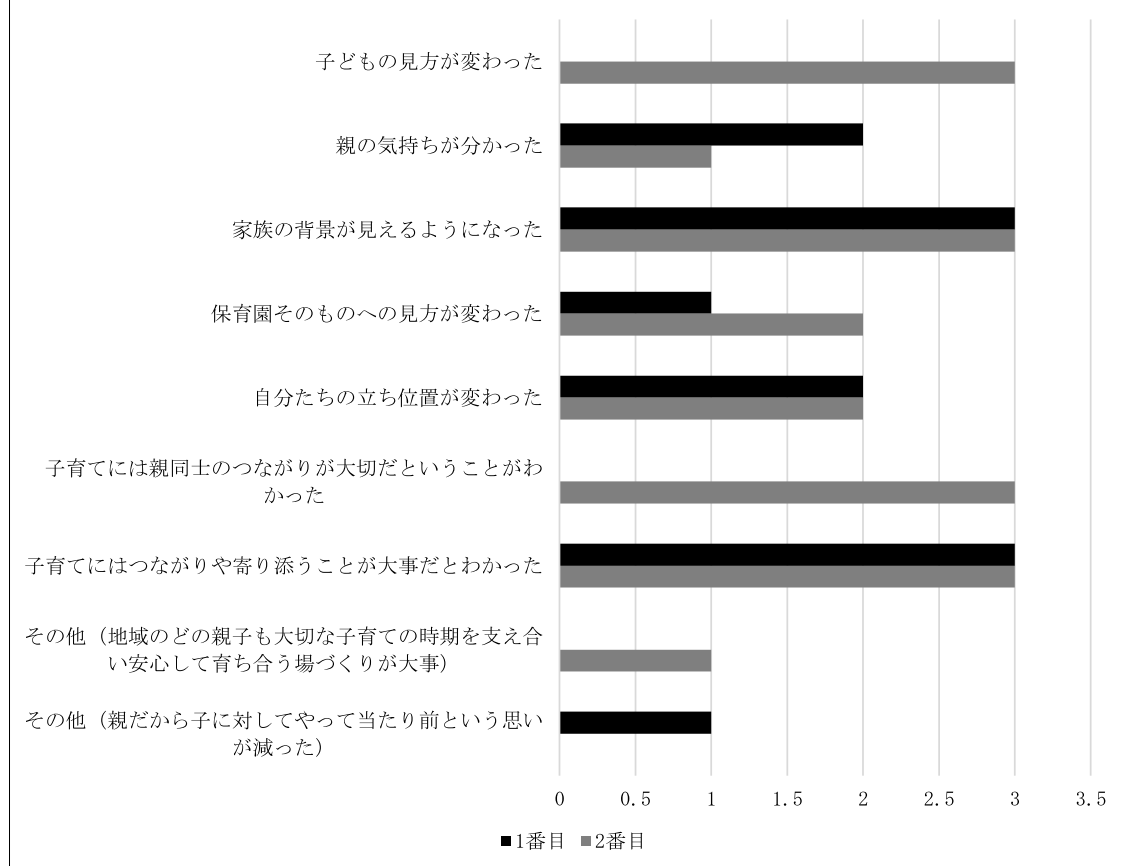
問11. 「子育て支援の場」での悩みごとの相談相手



問12-1 保育の現場と子育て支援の場の間の異動により、保育観に変化はあったか？



問12-2 具体的な変化の内容

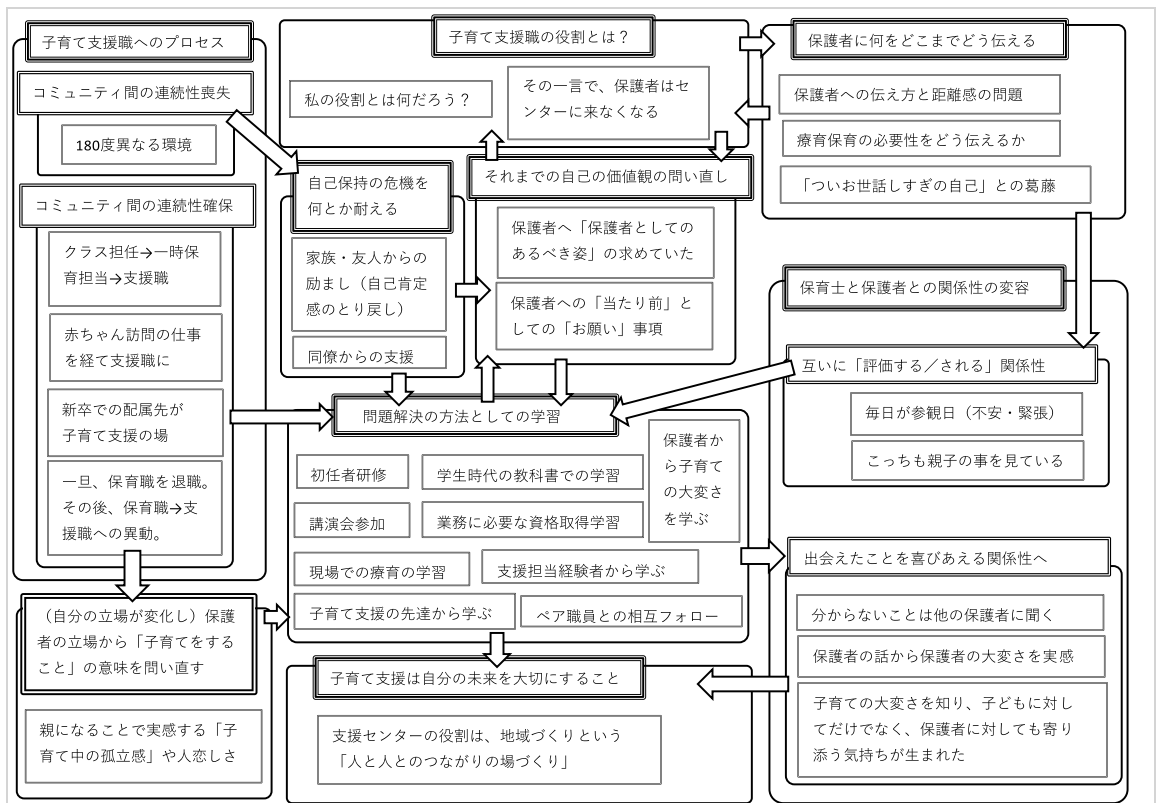


アンケート調査からは、「子育て支援の場」への異動が決まった時には、「子育て支援といっても、何をしたらよいの?」という思いが最も多かったこと、また「自分が何をどうすればよいのかわからなくなってしまった」という戸惑いを持ち、「子育て支援の場」への異動後は「それまでの業務内容から離れる異動だったため、『子育て支援』について学び直さなければならなかった」という悩みがあったことが明らかになった。これらの回答からは、「保育の現場」で発揮される保育士の専門性と「子育て支援の場」で発揮される保育士の専門性の差異が浮かび上がる。すなわち、「保育の現場」では、「昨日の子どもの姿」から「今日の子どもの姿」を想定し、環境構成やその日の活動を計画する。その連続性の中で保育が営まれていく。

換言すれば、保育の場においては、「ねらい」や「目標」に基づき、計画が立てられ、それに基づいて保育が実践される。その根幹にあるのが、保育士の「子ども理解」であると考えられる。保育のカリキュラムを支えているのは、当該保育士の「子ども理解」であるといえよう。したがって、「昨日・今日・明日」の保育の実践をつなぎ、道筋を立てていく根底に「子ども理解」があるといえる。「子育て支援の場」への異動において「何をどうすればよいかわからない」という戸惑いは、保育のカリキュラムに基づいた保育実践から「ノンプログラム」で「その日誰が来るかは分からない」「その日来た人でその日を創る」子育て支援実践への移行にともなう「戸惑い」として理解可能であろう。次頁に自由記述を整理する。

番号	自由記述（変化の具体的内容）
1	保育の現場で保護者対応で不安や緊張で硬くなってしまうことがあったが、様々な家庭の背景を知ること、同僚の先生からのアドバイスをもろうことで、少し保護者に関わりやすくなった。
2	保育現場にいた際は「子ども目線」に立ち、子どもが困らないよう代弁したり、お願い等伝えていた。また、子どもたちとの関わりでも日々見通しを持って自主性が伸びるよう、声掛けや援助を行ってきた。しかし、子育て支援センターへ異動となり、常に子どもと保護者が一緒。毎日来所する子はほとんどいない。設定保育などないという180度変わった環境となり、「保護者目線」でなければいけない。保護者が自ら気付けるような声かけや援助を支援するなど、日々の広場事業を通して学んだ。そして初任者研修を通して改めて支援者としての役割を学んだ。
3	利用者（親）の話を聞かせてもらう中で、子育ては孤独だと感じ、悩みや心配ごとを気軽に相談し合える環境が大切だと思った。ただ、自分から“困っている”と言える人もいるが、言えない人が多いのではと感じたので、保育士として保護者と接する中で、保護者のサインに気づいたり、一声かけられる人になりたいと思った。
4	子育て支援センターを保育園に併設するという事は、「保育園の窓を地域に向かって開けること」という言葉を実感。「地域の中で保育園は生きている」ということを実感。保育園の子どもも、地域の子どものも、同じように大切な子ども。この支援センターでは、オープン当初から独自事業として、「世代間交流の日」を設けた。月2回は0歳から100歳近くの人たちが集まり、「一世紀の空間」の日があった。高齢の方々と出会うことの少ない親子が多いことに驚くほど。又、高齢の方々も若い人（ママや子どもたち）との出会いが少ないことがよくわかった。その中で、保育園の役割、支援センターの役割というのは、地域づくりという「人と人とのつながりの場づくり」ではないかと考えるようになった。
5	地域で一人で子育て（夫が忙しいなど）している母親の大変さ、色々な悩みをもって子育てを頑張っていることを感じるようになった。保育現場から支援の現場に異動する間に、地域の親子の家に訪問するようになって身近に感じる機会が増えた。
6	支援担当の前、一度主任保育士を退職し、その後支援担当者として復職。退職前の7年間フリーとして全体を「俯瞰して見る」立場だったので、気になる子の多さに驚く日々。しかし現在、地域の様々な親子が来所する際、個性は色々「みんなちがってみんないい」という考えになった。
7	自分が利用者として子育て支援センターを利用している時は、「遊びに行く場」だったが、支援者になった時に、親子（特に親）を精神的に支えているのだということを感じた。Y先生の講演においても、親支援の重要性を学び、その後の支援の指針となった。
8	異動してからは「親だから子に対してやって当たり前。〇〇して当たり前」という思いが減った。クラス担任だった頃は、忘れ物をする親には「親なのだから子どもが困らないように〇〇して欲しい」という思いが強かったが、支援にまわると、親の意見や思いがいつも近く「親も大変なのだ」ということを肌で感じた。そう感じるようになってからその子どもの後ろにある生活はどうだったのか等、気にかけるようになった。
9	クラス担当時は子どもたちのための家庭での協力も当たり前をお願いしていた。支援センター担当となり、たくさんの親子と関わり、ほとんどが我が子を可愛いと子育てを頑張る母親たち。しかし、年々、育児能力が低くなっている現状と子どもを産んだら、皆、母性が高まるわけではないことを考えさせられた。その中で子どもたちのためにどのように伝えたらと最初はクラス担任のように必死で対応して失敗したこともあった。母親の育った環境で誰しもが愛されてきたのではないことをある母親から打ち明けられた。母親がとても厳しく、父親とのストレスを子どもにあたる、愛されている思いは薄い子ども時代だったと、義父母が本当の親と思い幸せを実感し、自分は子どもを大切にしたいと思えたと。親支援の重要性を痛感。求めるのではなく、話を聞く、受け止める、見守るの後方支援をする役割が大切なんだと学んだ。現在、0歳児担当者として仕事の大変さや育児疲れの母親の思いに共感し、子どもの可愛いエピソードを伝え、母親自身がちょっぴりでも笑顔になれるといいなと対応している。
10	保育現場にいる時に、自分も母になり、保護者の気持ちを考えることが出来るようになり始めた。クラス保育だけでなく、一時保育の担当にもなり、子ども目線だけでなく、保護者目線で考える機会も増え、子育て支援を意識することが多くなった。そのように意識や考え方の変化があり、子育て支援センターへの異動となったので、あまり抵抗なく、業務を行うことが出来ている。
11	新卒で子育て支援の担当になり、何をしたら良いのか…。自分ができることをやろうと思わせてもらい、とにかく子どもと楽しく遊ぼう、子どもが笑っていたら、親は嬉しいだろうと思ひ、そこが自分の役割だと思いながら進んだことがスタートだったことを覚えている。そこから新卒で子育てをしていない私にも話してくれたお母さんたち、とにかくお母さんたちがどんな思いで子育てをしているのかを聞くことは大切なのだということを教えてもらい、（そのことが）私の基盤になっている。
12	大人や子どもたちとどう信頼関係を築いていくかが大切。多様な思いを伝えて下さる言葉、子どもたちの心の声を敏感にキャッチできる感性を磨いて、出会えたことを喜び合いたいと思う。力不足を感じることも多いが、様々な機関の方々の力もお借りして、できることを全力で向かわせて頂ける。子育て支援センターで働かせて頂けることにとても感謝しています。赤ちゃんの頃出会い、幼稚園へ行き、別れが来てても何かあると会いに来てくれ、小学校で悩み、又来て下さるとずっとつながり、成長を見せてくれる。そんな嬉しいこともいっぱいあります。親子にとって、まず話そうと入口にして下さることに感謝しながら、共に考え、遊びの中、活動の中で一緒に成長を喜び合う時間、様々な困難を抱えている方は、悩み続ける。専門の方々へつなげてからも、一緒に考え続け、常に本音で話して下さっているか耳をすまして、お父さん、お母さんの思い、子どもたちの思いを考えながら、ちょっと乗り越えていけた喜びを共有させて頂き、いつでも来て頂ける場づくりをしたいと思う。

4. 自由記述とインタビューのコメントの分析



【図1】自由記述と半構造化インタビューによって得られた保育士自身の保育観／保育者観の変容

前頁に、アンケート調査における自由記述コメントを記載したが、本章では、この自由記述コメントと、半構造化インタビューで得られたコメントを KJ 法によって分析を行った。分析結果を図式化したものが【図1】である。

4-1 子育て支援職へのプロセス

4-1-1 コミュニティ間の連続性の喪失

本論は、「保育」から「子育て支援」への移行問題を念頭においていることから、ひとまず、移行の概念について確認しておきたい。宮崎（2009：35）は、移行について、「あるコミュニティから別のコミュニティへの移動を移行と呼ぶ。より正確に述べれば、移行とはコミュニティ間の境界横断過程を意味する。したがって移行は連続性と共に不連続性を特徴とし、それ故に、新たなコミュニ

ティにおいて新しい自己を創る過程であると同時に、自己崩壊のリスクに直面する過程でもある」と述べている。

ここでの要点は、「自己崩壊のリスク」である。宮崎の言説を本論の主題に即して敷衍すると、保育の現場で「担任」として、子どもの保育に関わっていた保育士が、「予期せぬ異動命令」によって、「自分は何者か」という問いに向き合わざるを得ない状況となる。本論においては、宮崎（2009：35）のいう「自己崩壊のリスク」を「自己保持の危機」と表現し、その危機を乗り越える基盤について検討していく。

アンケート調査と半構造化インタビューからは、子育て支援職に至るまでのプロセスとしては、コミュニティ間の連続性が失われ、異動を命じられた保育士が自己保持の危機に直面するケースと、異動を命じられても、コミュニティ間の連続性が

保たれ、自己保持の危機には直面していないケースの二つがあることが分かった。

前者は、コミュニティ間（保育の現場から子育て支援の場）の不連続性の「段差の大きさ」として認識され、移行に伴う自己保持の危機が生じる。後者は、コミュニティ間の連続性が確保され、コミュニティ間の段差も少ないと考えられる。

4-1-2 コミュニティ間の連続性の確保

コミュニティ間の連続性が確保されている事例としては、4つのパターンが確認された。1つ目は、「クラス担任だけではなく、一時保育の担当にもなり、子育て支援センターへの異動」という事例である。アンケートには、「クラス保育だけでなく、一時保育の担当にもなり、子ども目線だけでなく、保護者目線で考える機会も増え、子育て支援を意識することが多くなった。そのように意識や考え方の変化があり、子育て支援センターへの異動となったので、あまり抵抗なく、業務を行うことが出来ている」との回答が寄せられた。この事例からは、「クラス担任」から「子育て支援センター」への異動を直接的に行うのではなく、一旦「一時保育の担当」の役割が差し挟まれることで、当該保育士の「意識や考え方の変化」を醸成するための時間が確保されることによって「自己保持の危機」に直面することはなかったのではないかと考えられる。

2つ目も、1つ目の事例と同様の説明が可能であると考えられる。「保育現場から支援の現場に異動する間に」「地域の子育て家庭を訪問する仕事」が差し挟まれている事例である。アンケートには「地域の親子の家を訪問するようになって身近に感じる機会が増えた」との回答が寄せられた。保育の現場から子育て支援の現場への直接的な異動ではなく、「地域の親子の家を訪問する」業務を経たのちに、子育て支援職への異動であったため、コミュニティ間の連続性が確保されているものとして理解可能だろう。

3つ目は、そもそも、子育て支援センターへの異動はなく、「新卒で子育て支援の担当」となった

という事例である。「学生」から「社会人」への移行における「非連続性」はあるにせよ、「保育」から「子育て支援」への異動はなく、その意味では、コミュニティ間の連続性は確保されているといえる。宮崎（2009：35）の議論との関連で述べれば、「新たなコミュニティにおいて新しい自己を創る過程」は、新人として子育て支援の担当に配属されるなかで、子育て支援担当の職員としての自己を創る過程として捉えられるだろう。その意味で、移行問題の論点は、「自己の創り直し」にあるといえる。「自己保持の危機」が直面するのは、「一回創り上げた自己を壊さなければならない」ことにあると言えるだろう。3つ目の事例は、そもそも、初めて職業人としての自己を創り上げる過程として位置づけられ、したがって、「一回作り上げた自己を壊さなければならない」という局面にはないと言えよう。

4つ目は、保育の現場から子育て支援の現場に、直接的に異動していない点では、1つ目、2つ目の事例と共通するが、「一旦、保育職そのものを退職」している点に違いがみられる。「コミュニティの連続性の確保」という点においては、4つ目の事例は、「家族」というコミュニティがその連続性を担保しているものと考えられる。

4-2 自らの立場の変化による「子育てをする」との意味の問い直し

アンケートの自由記述と半構造化インタビューのデータからは、保育士自身が親となり、そのことによる変化が示されている事例が複数件あったことが確認された。アンケートには「自分も母になり、保護者の気持ちを考えることが出来るようになり始めた」との回答が寄せられた。では「保護者の気持ち」とは具体的にはどのようなものだろうか。別の回答には、以下のようにある。

「その頃の忘れられないことは、郵便屋さんが来たら、時間稼ぎするんですよ。話をしたくて。相手が話をしてくれるような問いかけをして、時間稼ぎそしているんですね。今思えば、あれが忘れられない。本当に人恋しかった。(略) その時代

の孤独な寂しさ。もう親たちの気持ちが痛いほど分かる」

「保護者の気持ち」とは、誰からも声掛けされず、子育てを一人で頑張らなければならない辛さなのではないかと推察される。このコメントからは、子育ての大変さの本質が「子育て中の親の孤立」であるとする捉えが浮かび上がってくる。この水準から、保護者が「子育てをすることの困難さ」と、その困難な状況において「子育てをすること」の意味が問い返されていると考えられる。

4-3 「予期せぬ異動命令」後の「自己保持の危機」と自己肯定感のとり戻し

アンケート調査と半構造化インタビューからは、勤務先の異動命令により、保育士本人の意向とは必ずしも一致しない異動の事例が複数件あったことが確認された。「予期せぬ異動命令」によって、「突然の支援センターに異動」となり、「別な部署で力を発揮してもらいたい」と説明を受けつつも、「私の中で府に落ち」ず、「驚き」や「想定外」の出来事だったとして意味づけられる事例や、「保育現場と180度環境が変わってしまった」状況のなかで、「何か色々受け止められない状況で」「最初に聞いた時には涙していた」という事例もあった。これは、前節で述べた「コミュニティ間の連続性の喪失」による「自己保持の危機」に直面した事例として理解可能だろう。先に述べたとおり、ここでの論点は、「一度創り上げた自己を壊さなければならない」ことにある。

この局面においては、家族から「今が頑張りどき」と励まされ、「とりあえず今はもうひたすら頑張るしかないかと思って頑張った」という回答があった。また別の事例では、友人に「話をして、ああそうかみたいな感じで、でも頑張るわというような繰り返しで話をしていた。解決にはならないかもしれないけれど、話すことで何とかその状況を切り抜けてきたという。どちらの事例においても、どんな自分であっても、励まし続けられる家族や友人の存在によって、自己肯定感が取り戻され、再び顔を上げ、再度、新しい職場で挑

戦しようとする「構え」が構築されると考えられる。「一度創り上げた自己を壊さなければならない」不安を乗り越えるための「親密圏」¹⁾としてのコミュニティの存在は、自己を保持するための砦となりうるのではないだろうか。

新しい職場で挑戦しようとする「構え」は、実践上の問題を解決するための方法としての学習に向かうための必須条件であると考えられる。それなくしては、何を学んだとしても、「問題解決の主体としての自己」の尊厳を保つことができないと考えるためである。換言すれば、「問題解決の主体としての自己」の尊厳を保つためには、「世界と共にある自己」(藤岡 2000: 86)であることが要請されるためである。

また、同じ職場の同僚からの支えがあることも、自己保持の危機を乗り越えるための重要な要件であると考えられる。

4-4 それまでの自己の価値観の問い直し

保育の現場から子育て支援の場への異動により、保育士たちは、それまでの自己の価値観の問い直しに直面していたことがデータから読み取れた。

アンケートには「子どもたちのためにどのように伝えたらと最初はクラス担任のように必死で対応して失敗したこともあった。」「保育現場にいた際は『子ども目線』に立ち、子どもが困らないよう代弁したり、お願い等伝えていた。」「異動してからは『親だから子に対してやって当たり前。〇〇して当たり前』という思いが減った。クラス担任だった頃は、忘れ物をする親には『親なのだから子どもが困らないように〇〇して欲しい』という思いが強かった」「クラス担当時は子どもたちのための家庭での協力も当たり前をお願いしていた」との回答が寄せられた。

特に注目すべきは「親だから子に対してやって当たり前」というコメントにある「親だから」「当たり前」という文言である。これは「保護者役割の規範意識」と言い換えてもよいだろう。すなわち、保育士は子どもの最善の利益を尊重するため、その保護者にも「子ども目線」で「お願い」

し、「当たり前」に子どもの保育にとって必要なことを要求していると捉えられる。

しかし、実際には、親の現状を目の当たりにしたり、子どもの生活の背後にある親の実態やその大変さを知ること、保護者へ「保護者としてのあるべき姿」を求めている自己の価値観を問い直さざるを得ない局面に立たされることになる。

4-5 子育て支援職の役割とは

子育て支援職への異動に伴い、子どもの健やかな成長・発達を願う「子ども目線」の視点から、保護者の悩みや生活の実態、子育ての悩みに寄り添うような「保護者目線」の視点への移行が、保護者との日常的な関わりのなかで求められるようになることが、データから浮かび上がってきた。

「何を求めてこのお母さんは来ているのか。とにかく癒やされたい、ほかのお母さんと話がしたいなのか、手伝ってねと言われることに喜びを感じるタイプのお母さん、そういうタイプなのか、ちょっと1人にさせてほしいわというタイプのお母さんなのかという、その見極め、何を目的にして来ているのかというところの見極めをしながら、そのお母さんにお声かけしているというような現状があるんですけども、そこを誤ってしまったら、もう二度と来てもらえないということもありますし、その緊張感というところは常に今でも、これは永遠のテーマなのかな」

「そのお母さんが誰もいないところで、『先生、ここってママ友をつくらなきゃだめですか？』って言われて、『えっ、どうして？』って言ったら、『私はママ友とかつくるというより、ここに来るだけで精一杯で、だから先生がツナげるとか、そういうのはいらないんです』みたいなことを言われて。(略) あんまり人と関わりそうもないから、ちょっとお話をするお母さんがいたらいいかなと思ったら、『それは余計なお世話』、『それはいらない』っていう話をして、『そういつてははっきり言ってくれて、私がおとなふうに気をまわして(お母さんを)困らせなくて、よかった』と言って、『分かったよ』と言って。楽しんでいってねとって、

そういうこともありました。」

子育て支援センターに保護者が何を求めて来所するかにより保育士には異なる対応が求められる。ニーズの異なる個別的な対応には万能な解答はないため「永遠のテーマ」となることが理解される。

4-6 保護者に何をどこまでどう伝えるか

保護者に何をどこまで伝えるかについては、複数の保育士から、その難しさについての回答が、以下のように寄せられた。

「イヤイヤ時期だから、こうこうこうでね、みたいな、ちょっとマイナーな話を私は自分では分からなかったんですけど、多く語っていたみたいなんです。お母さんとしてはとっても嫌だったみたいで、それで私への不満みたいなのを他の人に言ったみたいで、それでちょっと一時私の顔を見るのを、ああっていうように見られてしまって、誤解は解くことができたんですけど、よかれと思うことを伝えたつもりが押しつけになっていた。言い方一つで、子育てが大変なときに担当保育士に言われることが嫌だとか、嫌な思いとかそういうのをさせてしまって反省することがやっぱりありました。」

「3歳児健診になる手前ぐらいのときに、気になっていた子どもの言葉がなかなか出ないため、母親に言葉を選びながら慎重に、話を切り出した。専門的な立場から話を聞いたほうが安心するのではと思い、『保健師さんとお話をしてみたら？』とアドバイスした。すると、『自分じゃできない』と言われ、『私から担当の保健師さんに連絡することもできるよ』と言うと、『お願いします』とのことだったので、すぐ保健師に連絡をし、母親へとつなぎ、相談日程も決めたとき、安堵していた。しかし、後日、保健師より『やっぱりうちの子は大丈夫なのでいいです』とキャンセルになったと連絡が入り、とても驚き、と同時に、あの時、母親と私の思いの熱量に差があり、もしかしたら、私に押された形で、つい返事をしたのかもしれないと、そのことも含めて、上司に報告すると、『先走ってしまったのではないのか？』と言われた。

『子どものために早く伝えた方がよいのでは?』と思った私と、母親の思いに大きなすれ違いがあったのだろう。なぜ、あの時、母親の気持ちをもっと少し分かってあげられなかったのか。自分の思いのままに、母親との距離を詰め寄りすぎてしまった。関わり方の難しさを痛感した。」

「(クラス担任時代は)とにかく保育士なので学校に行ってから困らないようにということが先行していて、お子さんのためにも間違ったかわり方をしてはいけないし、学校に引き継ぎをする際にも了解をもらわなければいけなかったので、その了解をもらうためにも保護者の方にお知らせをしていた、お伝えをしていたということがあったんですけれども、そのときのお父さんとお母さんの表情といたら本当に驚きと不安と、今後我が子はどうしてもいったらいいんだろうかという不安と悲しみとみたい、そういう表情をされる方がほとんどで、今回こういう形でお知らせすることが本当によかったんだろうかって、毎回毎回担当と振り返りをしながらいたんですけれども、今回支援センターに配属になった時に、ご両親はお子さんのことをよく実は分かっていて、我が子の特性だったり個性だったりというところをひっくりめた上で愛情をかけられていて、生活も育てづらさを抱えながら一生懸命されていたというところを理解されているながら、やっぱり生活しているものなんだなというのは支援センターに配属になって理解できたというところがありました。なので、ここを経験していて保護者にお伝えするときに、きっと伝え方が違っていただろうなって。そのお子さんのことをまず認めつつ、こういう部分はいいところもあり、こういう部分はこれからの課題でありということも、家族の背景がもし理解できていたんだとしたら、もう少しやわらかい伝え方ができたでしょうし、前向きな、お互い手を取り合ってやっていきましょうねって、学校に入学しても苦しくなったら戻ってきてもいいんだよというような、そういう伝え方ができたんであろうなというふうに考えたら、支援センターの経験というのは大きなものがあつたし、自分を変えて

くれたなというところでは、いい経験だったなとは思っています。」

「どうしてもクラスの保育士って前面に出ちゃう。どうしても保育士ってやっぱりお世話をしちゃうという性質なんだけど、でも支援センターの担当って、後ろから支援するというような立場ということは、(頭では)分かってはいるのだけれど、ついつい『余計なお世話』ということも…」

上記のコメントからは、保護者への伝え方の難しさと保護者との距離感の問題、療育保育についての必要性をどのように伝えるかについての問題、保護者との距離を詰めすぎて、「ついお世話すぎ」てしまう自己との折り合いの問題、葛藤が浮かび上がる。どの問題も、既に個人の価値観が確立していると考えられる成人としての保護者との関わり方の難しさを述べているものと捉えられる。子育て支援センターへの参加は、自由来所であるがゆえ、何か問題や行き違いが起これば、その親子の来所はなくなってしまう。

子育て支援職としての役割を果たすためには、そうした人間関係の取り結び方の難しさを、何らかの方法で乗り越えることが、求められると言える。

4-7 互いに「評価する／される」関係性

調査では、子育て支援の場においては「毎日が参観日」「親子がいつも一緒」「保護者対応で不安や緊張で硬くなってしまう」との回答が寄せられた。このコメントからは、保育士が保護者からある一定の価値基準で眼差され、評価の対象とされていると考えられる。すなわち、「評価の対象としての保育士(評価される立場)」と「評価する保護者(評価する立場)」としての人間関係が想定される。これは、『まなざし』の非対称性(須藤 2007: 31) 問題として理解することも可能なのだが、調査から得られた保育士の言葉には「こっちも親子の事を見ている」というものがあつた。

子育て支援の場における人間関係の問題点としては、力の不均衡問題である『まなざし』の非対称性問題として理解するよりも、むしろ保育士

と保護者が互いに「評価する／される」という関係性に閉じてしまっていることの問題として理解するほうが、妥当なのではないかと考える²⁾。

それでは、「評価する／される」の関係性から解放されるような人間関係の結び直しは、いかにして可能となるのだろうか。

4-8 問題解決の方法としての学習

得られたデータからは、それぞれに問題状況の限界を突破するために、様々な様式や形態の学習がなされていたことが確認された。

例えば、子育て支援職に就いた際の「初任者研修」や、「講演会への参加」、職務に必要な知識を補うための「学生時代の教科書での学習」、業務上必要となる資格を得るための「資格取得学習」、保育の現場で「気になる子」への対応をするための「療育の現場での実地学習」、対応に困難な事例を検討するため「支援担当の経験者から学ぶ」こと、参加者の年代に合わせた「ペアの職員との相互フォロー」、子育て支援とは何かを問うため「子育て支援の先達から学び」を得ること、また、日々子育てをしている保護者から「子育ての大変さを学ぶ」ことなどを通じて、保育士たちは既存の価値観を相対化し、より重層的な視点から子どもの生活や育ちとその背後にある保護者の生活やその困難さを理解可能なものにしていった。

これらの学習を契機とし、問題状況を乗り越えるような新たな「保育観」「保育者観」の獲得による変容が保育士にもたらされ、保育士の子ども理解、保護者理解、それを支える自己理解の枠組みが拡張されていったのではないかと考える。

4-9 出会えたことを喜びあえる関係性へ

保育士と保護者の関係性が、互いに「評価する／される」関係性から、「出会えたことを喜びあえる関係性」へと変容するのには、保育士たちの学習が必須の条件であったと考えられる。すなわち、互いに「評価する／される」関係性は、無媒介的に、自然発生的に変容するのでなく、保育士たちの個々人の、もしくは集団的な学習活動によって、

保育士と保護者の関係性は信頼関係で結び結ばれたものへと変容していったのではないかと考える。その変容は、「保護者から子育ての大変さ」を知り、その子育てを「共に担う者」として、子育て支援職である自己を捉え直す機会を得たことによるものと考えられる。

調査では、「分からないことは他の保護者に聞く」という回答が寄せられたが、これは、自己の有限性を認識したうえで、子育てを協同的に保護者たちと分かち合っていこうという「構え」の変化として捉えることが可能である。保護者の話から保護者の大変さを実感し、「大変さ」を共有することで、子育てを「我がこと」として捉えることが可能となっていくのではないだろうか。

冒頭で紹介した「予期せぬ異動命令」を経験した保育士の事例では、必要な知識を再度身につけ、子育て支援の現場で実践を重ねることで、その意味づけに変化がみられていたことが確認された。子育て支援の現場での「流れが分かり」、「まだまだ声掛けにしろ、援助にしろ、試行錯誤の段階」であっても、「何回か会っていくうちに、子どもから近寄ってきてくれたり、ちょっとずつ関係性が築けてきたかなとか、保護者の方もいろいろお話してくれるようになったかな」というときには、ちょっと『やった!』というふうには思える」というように、前向きな捉えに変化している。

4-10 子育て支援は自分の未来を大切にする

データのなかには、子育て支援を地域づくりとの関連で言及されたものがあつた。これについて、引用しておきたい。

「前園長が『子育て支援は生き方だ』って話したんですって。それにものすごく感動したんだって。すんときてそうだと思えた。だから、前園長の話が聞けて本当によかったという話をしてくれていましたよ。(略) 保育園の窓を開けるということは地域に向かうということでしょう？風を入れるということでしょう？そうしたらいろいろなことが起きるだろうなと。すごい怖かったし、はあ～と思ったんだけど、すごく地域づくりに夢

のある話だなと思いながら聞いていて。(略) 子育て支援はやっぱり生き方だというけど、特別なことじゃないですよ。『今は仕事としてやっているから子育て支援をやっています』ではなくて、地域で生きている人たちみんなが子育て支援者だったらどれだけ幸せだろうと思うの。やっぱり子どもを大事にするということは、自分を大事にすることでもあるんですよね。そうなの。自分の未来を大事にすることなんですよ。」

このコメントでは、自身を子育て支援職に誘った「前園長」の言葉が伝えられている。「子育て支援は生き方だ」という話に別の子育て支援職の保育士がとても共鳴したという内容と、その前園長の紹介で、日本の子育て支援の先達から学び、子育て支援の本質を捉えることができた内容が語られている。それは、「支援センターの役割は、地域づくり」ということであり、「人と人とのつながりの場づくり」を生み出すことであり、「子どもの未来を大事にすることが、自分を大事にすることでもある」ということである。子育て支援の本質は、他者との関係性のなかに拓かれ、共に生きようとする人々の間に培われるものとして理解することが可能だろう。

5. 結論と残された課題

本論の課題は、「保育の現場」から「子育て支援の場」に「異動」(もしくは、「子育て支援の場」からの「再異動」)を経験した保育士を対象に、「子育て支援の場」への異動／「子育て支援の場」からの再異動によって、どのような葛藤や違和感を持ち、その後どのように保育観や保育者観を変容させていったのか」を明らかにすることであった。

その葛藤や違和感の具体的な内容は、「自分が何をすればよいかわからなくなってしまったこと」という回答に端的に表れているといえる。すなわち、保育士自身のすべきこと(仕事)の見通しが失われ、「何をすればいいかわからない」状態になったことであった。保育の現場において、仕事の見通しを支えているのが、当該保育士の「子ども理解」であることが示唆された。すなわち、保育

者の「願い」や「ねらい」によって、保育の環境が構成され、子どもの成長発達に寄与する活動が立案され、実践され、記録され、省察される。この一連の保育の過程においては、当該保育士の「子ども理解」が基盤となり、保育のカリキュラムが設定されているものと考えられる。

他方、「子育て支援の場」においては、その日に誰が来所するかもわからず、ノンプログラムで親子の来所を待ため、「見通し」を持つことはできず、「その日来た人でその日を創る」ことになる。「自分が何をすればよいかわからなくなってしまった」という戸惑いの背後には、「保育の現場」には、「子ども理解」に基づいて展開される保育カリキュラムがあるということが示唆される。

分析の結果からは、【図1】で示されるように、保育士のなかには葛藤や違和感を抱えたケースが見られた。それを乗り越えるための方法として、何らかの学習があったことが確認された。

その具体的な内容としては、学生時代の教科書による学習や、初任者講習、講演会への参加といったものから、職場におけるペア職員との相互フォロー、前任の支援担当者から事情を聴くなどの職場の人間関係を基盤とした集団的な学習活動があったことも確認された。

また、「支援対象者」とされる保護者から「子育ての大変さ」を学ぶ機会を得ることで、保育士と保護者との関係性は、「評価する／される」関係性の限界を越え、「出会えたことを喜びあえる関係性」へと変容していったことが分析から導出された。

分析結果からは、保育から子育て支援への異動を経験した保育士は、「クラス担任」としての「自己のアイデンティティの喪失」を経験しつつも、仲間・同僚からの支えや自分自身が親になることを通し、「他者の視点」を獲得することで、子どもの育ちをより重層的に捉えることが可能になっていったと考えられる。子どもの育ちを、子どものみに焦点化し理解するのではなく、子どもの生活と成長を支える子育て家庭(保護者)の存在、それを支える保育所・子育て支援センターの支え、更にそれらを支える地域でのつながりのなかで捉

えることができるような保育観／保育者観の変容が生成されていったのではないかと考えられる。

地域のつながりのなかでこそ、より豊かな子どもの育ちが保障されるということを、保育から子育て支援への移行によって、保育士自身が経験的に理解していくなかで、移行経験者の「子ども理解」は、より豊富化されていくものと考えられる。

本論においては、亀崎（2020）の研究を位置づけることができなかった。亀崎（2020）は、保育士の子育て支援に関する葛藤について「子どもに対する倫理責任」と「保護者に対する倫理責任」の間の倫理的ジレンマの問題として整理している。亀崎の研究を位置づけることが今後の課題である。

謝辞

本論の執筆にあたり、アンケート調査及びインタビュー調査にご協力を頂きました A 県 C 市の保育士の皆様に深く感謝申し上げます。

付記

本論の作成にあたり JSPS 科研費 18K18615（研究代表者：北海道大学 川田学）の助成を受けた。

注

1) 親密圏の議論に関しては、ハンナ・アレント（1994：87-88）、齋藤純一（2000：90-92）、佐藤一子（2003：20）など。齋藤純一は、親密圏を「自己が自己でありえ、存在（エートル）と外観（パレートル）とが分裂しない透明な空間」（2000：90）とし、「具体的な他者の生／生命への配慮・関心によって形成・維持される」（2000：92）としている。齋藤（2000：94）は、「親密圏」の具体的な事例として、セルフヘルプ・グループを挙げ、佐藤一子（2003：20）も、そのほかに「居場所」「シェルター」などと関連づけ議論している。本論でいう「親密圏」も齋藤、佐藤らの議論に依拠している。

2) 「評価する／される」の関係性は、「何らかの尺度」により、その振る舞いや言動が相互に査定される関係であるといえる。「何らかの尺度」を考える際、アリストテレス（1973：87）の言う3つの「愛さるべきもの」は示唆的である。彼によれば、3つの「愛さるべきもの」とは、「善

きもの」「快適なもの」「有用なもの」であるという。この考えを参照すると、人間関係における「評価する／される」の評価尺度も「有用なもの」「快適なもの」「善きもの」の3つが考えられうる。有用さ（便利さ）、快適さ（利他的な喜び）は外側の状況によって規定されるのに対し、「善きもの」（最高善）は、人間の内側から溢れ出る心の状態こそが、幸福を規定するものであるとされる。「有用さ」や「快適さ」の尺度が、外側の条件に規定されているという点において、その尺度には限界があると考えられる。「評価する／される」の尺度が、仮に「有用さ」や「快適さ」に基づくものであれば、それらには限界があるだろう。

文献

- アリストテレス（高田三郎訳）『ニコマコス倫理学（上）』岩波書店、1971年
- アリストテレス（高田三郎訳）『ニコマコス倫理学（下）』岩波書店、1973年
- ハンナ・アレント（志水速雄訳）『人間の条件』筑摩書房、1994年
- パウロ・フレイレ（小沢有作・楠原彰・柿沼秀雄・伊藤周訳）『被抑圧者の教育学』亜紀書房、1979年
- パウロ・フレイレ（三砂ちづる訳）『新訳 被抑圧者の教育学』亜紀書房、2011年
- 藤岡完治『関わることへの意志—教育の根源』国土社、2000年
- 亀崎美沙子「子育て支援の葛藤における保育士の意識構造—保育士の語りの質的分析から—」『十文字学園女子大学紀要』vol.50、85-97、2020年
- 片山美香「若手保育者が有する保護者支援の特徴に関する探索的研究—保育者養成校における教授内容の検討に生かすために—」『岡山大学教師教育開発センター紀要』第6号、11-20、2016年
- 片山美香・高橋敏之「保育士の保護者支援力の認知と親アイデンティティ及び保育者効力感との関連」『日本家政学会誌』Vol.72 No.6 348-361、2021年
- 勝浦真仁・上田敏丈「保護者支援における保育士の抱える困難感のフェーズを探る—保育士による保護者支援のための文献研究—」『桜花学園大学保育学部研究紀要』第24号、35-50、2021年
- 柏女霊峰「保育士資格の法定化と保育士の課題」『淑徳大

- 学総合福祉学部研究紀要』第41号、1-18、2007年
- 川喜田二郎『発想法』中央公論新社、1967年
- 川田学「総論 問題としての子ども理解」『発達』通巻第168号、ミネルヴァ書房、2-8、2021年
- 川田学「平成30年度（2018年度）挑戦的研究（萌芽）研究計画調書」、2017年
- 北野幸子「家庭との連携に関する保育者の専門性に関する検討」『保育学研究』第55巻第3号、9-20、2017年
- 厚生労働省編『保育所保育指針解説』フレーベル館、2018年
- 香曾我部琢「保育者の転機の語りにおける自己形成プロセス—展望の形成とその共有化に着目して—」『保育学研究』第51巻第1号、117-130、2013年
- 宮崎隆志「移行過程支援研究の課題」『子ども発達臨床研究』第3号、35-44、2009年
- 宮崎隆志「ソーシャル・キャピタルとケイパビリティ：移行過程支援との関連で」『社会教育研究』第27号、15-30、2009年
- 宮崎隆志・日置真世「地域生活支援による自己構造の発展論理：社会的に排除された若者の自立支援との関わりで」『子ども発達臨床研究』第4号、11-20、2010年
- 齋藤純一『公共性』岩波書店、2000年
- 佐藤一子編『生涯学習がつくる公共空間』柏書房、2003年
- 須藤廣「現代の観光における『まなざし』の非対称性—タイの山岳民族『首長族(カヤン族)』の観光化を巡って—」『都市政策研究所紀要』北九州市立大学都市政策研究所編、第1号、31-41、2007年